

## 研究所だより

榎本 木綿

今年も残りわずかになりましたが、相変わらず協同総研はバタバタと活動しています。12月もまだ半ばながら、代表者会議や社会連帯総会、韓国からの視察団受入れや農業ネットワーク会議の産直市場グリーンファーム(長野県伊那市)視察など、フルに活動しています。特に韓国の視察団の方々は協同総研会員である韓国釜山の民主主義社会研究所の金河元所長が中心となり、自活センターの方など9名が訪問されました。2日にわたり学習会などの交流やワークスコープちばの現場視察などを行い、現在の韓国における協同組合基本法法制化の現状や貧困者層を対象とした仕事おこしの状況等、いろいろと相互に学び合った訪問でした。後日、訪問記なども会員だよりに寄稿頂きますので、お楽しみに。

さて、年の瀬のこの時期は、はたしてこの一年、自分はいったいなにをなしただろう…と考え、落ち込む時期でもあります。日々バタバタと目まぐるしく駆け回るばかりではいけないと思いつつ、暮れのこの時期になってようやく反省といった感です。

とくに今年2011年は忘れ難い年となりました。3月11日に起きた東日本大震災と福島での原発事故の甚大な被害はまさに筆舌に尽くし難いものでした。国による復興へ向けた取り組みが注力され、動き出してはいるものの、現地に足を運ぶとやはり9か月経った今でもその爪痕の深さを実感します。とくに福島では見通しの立たないなか、

目には見えない放射能との闘いの日々に、地域の方々の心身の疲れ、背負われている負担や不安の大きさが心配です。

先週末、やはり被災の爪痕の残る福島県相馬市を訪問してきました。山や海に囲まれ風光明媚なこの土地では、震災以前は主に漁業や水産加工で生業をたてていましたが、津波により沿岸部の家屋や加工場は破壊され、さらに原発事故によって海が汚染されたため、業を再会できる目途がたちません。現地の放射線汚染量は比較的低い為、周辺の飯館や南相馬から避難してきた方々を仮設住宅に迎えています。

こうしたなか、被災直後から現地の被災者の方たちが作った「NPO法人相馬はらがま朝市クラブ」という団体とご縁があり、今回訪問しました。彼ら自身が被災者でありながらも、これ以上一人の命を落とすことのないようにとの想いから被災者支援の取組みを3月以降ずっと続けています。毎週末の土、日曜には朝市を開き、全国からの支援物資を配布・格安販売し、さらに平日はリヤカー行商で相馬市内の仮設住宅を回って生鮮食品や日常用品を格安で販売し、毎日全戸を声掛け訪問しています。どこの仮設に、どの年代の方が、独居で暮らしているなど、住民の現状を確実に把握して、行政とも連携を重ねています。ここではリヤカー隊の訪問が仮設のなかでのコミュニティを生み出し、悪しき意味での個人情報保護の壁を取り崩して被災者同士の